

[ワークショップレポート] ゴミ拾いから地域を考え対話するワークショップ@新百合ヶ丘駅

2015年10月31日、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター(以降、国際大学 GLOCOM)は、川崎市環境総合研究所、株式会社ピリカ、NPO 法人グリーンバードの協力を得て、川崎市麻生区役所内の会議室をお借りし、通算 2 回目となる「ゴミ拾いから地域を考え対話するワークショップ」を実施しました。今回の場所は小田急線の新百合ヶ丘駅周辺。場所が異なると、データはどのような傾向の変化を示すのか。当日の活動内容をレポートします。

ワークショップを実施する目的

GLOCOM の主任研究員・准教授の庄司昌彦氏によると、今回のワークショップのキーワードは、「環境情報データ」と「コミュニティの活性化」の 2 つです。庄司准教授は、眠っている過去の環境データの発掘と新しい環境データの作成が、地域環境の現状を知り、より良いものにしていくための地域コミュニケーションを媒介すると考えます。

今でこそ、川崎市は住みやすい住宅・商業地として発展していますが、少子高齢化が進展し、人と人とのつながりが希薄になっていくと、現在の良好な環境を維持することが困難になることも予想されます。このワークショップは、生活者にとって身近な路上のポイ捨てゴミをテーマに、過去と現在のデータを基にした対話を通じて、地域環境を良くするための協力関係の構築方法を探ることを目的としています。

地域住民の中には自分達が住んでいる環境を良くするための問題解決に熱心な人もいれば、必ずしも環境問題に関心の高くない人もいます。そこで、今回のワークショップでは前回のプログラムを一部改変し、より多様な価値観を持つ人々を巻き込むための方法を考えるグループワークの時間が設けられました。

過去の環境データからわかる川崎市とゴミの関係

ワークショップの趣旨説明に続き、国際大学 GLOCOM の菊地映輝氏より、路上ポイ捨てゴミ問題に関する過去のデータ素材として、昔の川崎市の日常風景が収められている写真と、川崎市が過去に制作した市政ニュースの動画が提供されました。古い写真や動画は現在私達が見ている風景とは全く異なる景観を示す証拠であるのと同時に、ある地域がどのように変化したかを理解することに役立ちます。また、これらの写真や動画は「環境」の文脈で撮影されたものではありませんが、環境という切り口で編集することでコミュニケーションの材料になります。今回のワークショップでは、参加者が 1 人につき 3 つ以上の感想を付箋紙に書き、グループで気づきをシェアしました。

「昔はどんなゴミが道路に落ちていたのか?」「海にし尿ゴミを捨てに行っていた!」「昔は今よりもマナーが悪かったとは限らない」「ポイ捨てが当たり前だった時代があった」「オリンピックを目標に美化運動が活性化した」「外圧(オリンピック)があると行動が変わるのか?」「清掃ボランティア活動が今に続いている」「自治会の力が大きい」「町内会に入っているか否かの違いがありそう」「ゲーム感覚で拾うのは楽しそう」「ゴミ拾いキャンペーン活動に無関心な人も」「自分事として捉えているのか?」「自分の場所だったらきっと捨てない」などの意見や感想が寄せられました。

ポイ捨てゴミに無関心な人達を振り向かせる方法

多様な人々を巻き込むためには、興味がある人だけでなく興味がない人の気持ちも動かすことが重要になります。そこで、どのような人達が路上ポイ捨てゴミを問題と考え活動しているか、逆にどのような人達が興味を持っていないのか、関心の度合いに応じて人を分類し、路上ポイ捨てゴミに関心を持たないのはなぜかを 3 つのグループに分かれて考えることになりました。アウトプットは、路上ポイ捨てゴミを防止するためのチラシです。30 分後の発表結果は以下の通りです。

● グループ A

コピーは「拾う／拾わないどっちがカッコいい?」。特定の人を悪く言うのではなく、関係者全員に語りかけるポジティブな言い方にしたのがポイント。ポイ捨てする人を非難すると角が立つが、他の人が出したゴミを片付けることを称える方向で発信した方がよいと思う。



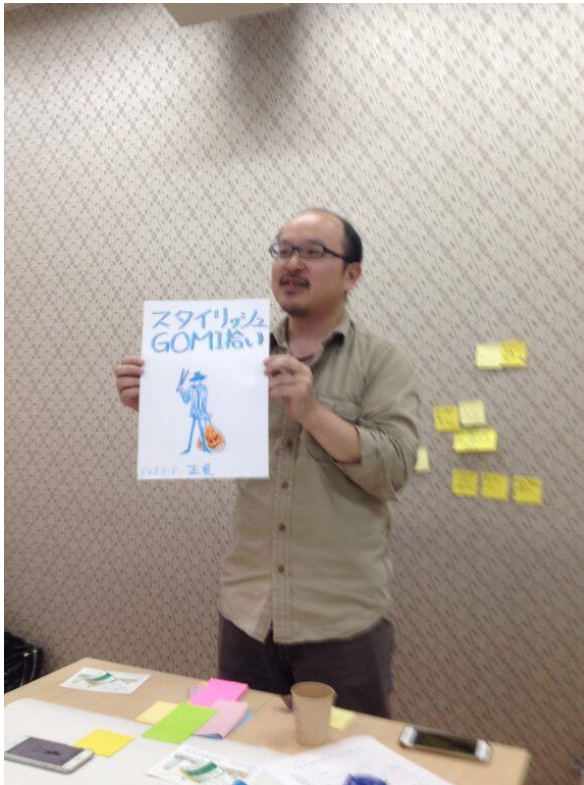
● グループ B

コピーは「喫煙所に行こう!」。タバコを吸ってはいけないエリアは色々な場所で告知されているが、喫煙者向けの喫煙所マップはない。どこで吸えるのかわからないからその辺に捨てるのではないか。駅周辺の喫煙所の場所がわかれば、そこまで行こうとなるかもしれない。ポイ捨てが少しは減るのではないか。



- グループ C

コピーは「スタイリッシュ GOMI 拾い〜ドレスコードは正装〜」。ゴミ拾いのイメージをポジティブにした。正装に清掃をかけてダブルミーニングになっているところがポイント。きちんとした服装でゴミを拾って、カッコいいポーズで写真を取って、ゴミ拾いそのものを好きになってもらうことを目標にした。



落ちているゴミの数の調査方法

ポイ捨てゴミの計測では、ゴミ拾い SNS「ピリカ」を運営する株式会社ピリカ（以降、ピリカ）が開発した調査手法を利用しました。調査地点に向かう前に、ピリカ代表取締役の小嶋不二夫氏より、ゴミ拾い調査の方法とルールについての説明を受けました。

● 調査地点の決定

各調査地点のゴミをすべて拾って数えると時間がかかりすぎることから、この調査では次の 5 つの条件をできるだけ多く満たす長さ 10m の範囲のみを対象とするルールを適用しています。

- 調査をする上で危険がない場所
- 人やお店に迷惑をかけにくい場所
- 植込み、側溝がある場所
- ゴミの集積所やゴミ箱がない場所
- 交差点以外の場所

● ゴミ拾いの対象

各調査地点の道幅、交通量、施設の立地状況には差があることから、調査対象は以下の条件に絞り込んでいます。

- 大通りは道の片側のみを対象とする
- 大通り以外は道全体を対象とする
- 車道は歩道から約 1m の部分までを対象とする
- 基本的に歩道のみを対象とする
- 歩道から奥まったところに施設がある場合、歩道から 1m のみを対象とする

● ゴミの分類

ゴミを数えるにあたって、落ち葉などの自然のもの、へばりついてすぐには取れないガム、建物の中のゴミを除き、各調査地点のゴミは「見えやすい場所」「見えにくい場所」の2つの大分類と「タバコ」「ガム」「飲料・容器」「その他」の4つの小分類の合計8分類を用いています。

- 「見えやすい場所」：明らかに路上に落ちているとわかるゴミ
- 「見えにくい場所」：植込みの中、側溝の中、看板やコーンの影、建物の隙間等に隠れているゴミ

説明の後、先述したチラシのデザインを行ったのと同じ3つのグループに分かれ、それぞれの担当地域に向かいました。なお、屋外への移動と現地での調査では、全国でゴミ拾い活動を行っているNPO法人グリーンバードの協力により提供されたビブスと軍手を全員が着用しました。









ゴミ拾いをやってみて気付いたこと

ゴミ拾いの終了後、各自が気づいたことをシェアするための対話を行いました。グループの担当エリアはそれぞれ異なるため、路上での発見はそれぞれ違うことが予想されました。そこで、各グループで1人のテーブルオーナーを決め、その他のメンバーは10分単位でテーブルを移動してお互いの意見をシェアする「ワールドカフェ」という手法でグループワークを進めました。合計3ラウンドを実施し、どのような意見が出たかを発表しました。各グループの発表内容は以下の通りです。

● グループ A

全体的にキレイ。道に面しているビルやマンションの人がきれいにしている。その反面、駅前にある店舗の裏の、従業員出口のところにゴミがあった。植込みに多くのゴミが隠れている。大きなゴミはなく、ちぎれた紙が散乱しているなど、細かいものがほとんど。ポイ捨てする人が少ないからキレイなのだろうかという話をした。

- グループ B

川崎駅周辺と比べてゴミの数が少なくてキレイだと感じた。特に、ホテルの裏側では、ちょうど掃除をする人が回って来ていて、見えやすいところにゴミがない状態だった。比較的汚れていたのは、駅前のペデストリアンデッキから降りた場所。歩道と車道の両側に植込みがあったが、どちらかというと歩道側の植込みにゴミが多かった。

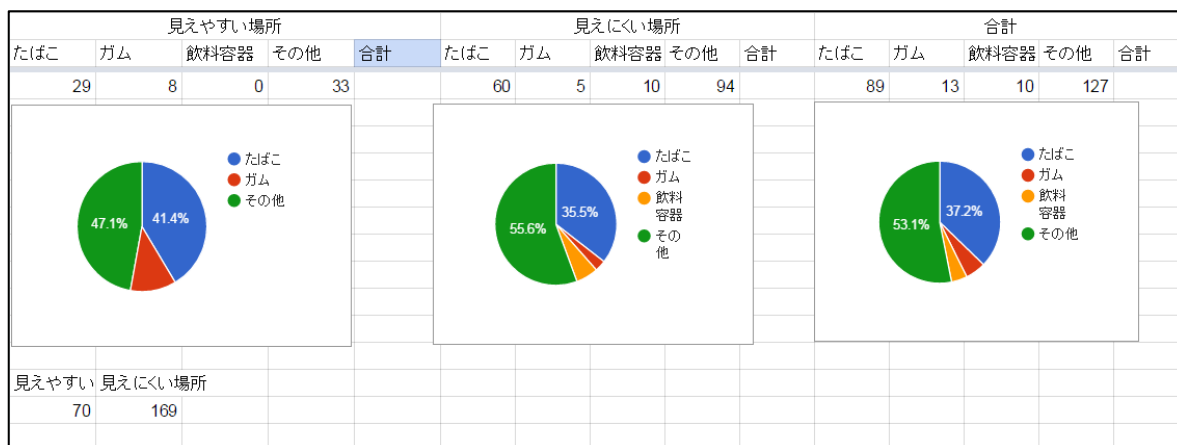
- グループ C

全体としてゴミが少ないという話をした。多かったのはタバコでその他は銀紙など。車道と歩道の間に植栽があるところは両側にゴミが集まっていた。ゴミはアクシデント的なものと故意に隠しているものがあるように思う。後者は場所を選ばずに捨てているのではなくて、わざわざそこを選んで捨てているということ。見えやすいところは掃除しているが、見えにくいところまでは掃除をしないのか、見落としているのかもしれない。活動中に「ご苦労様」と声をかけられたのがうれしかった。

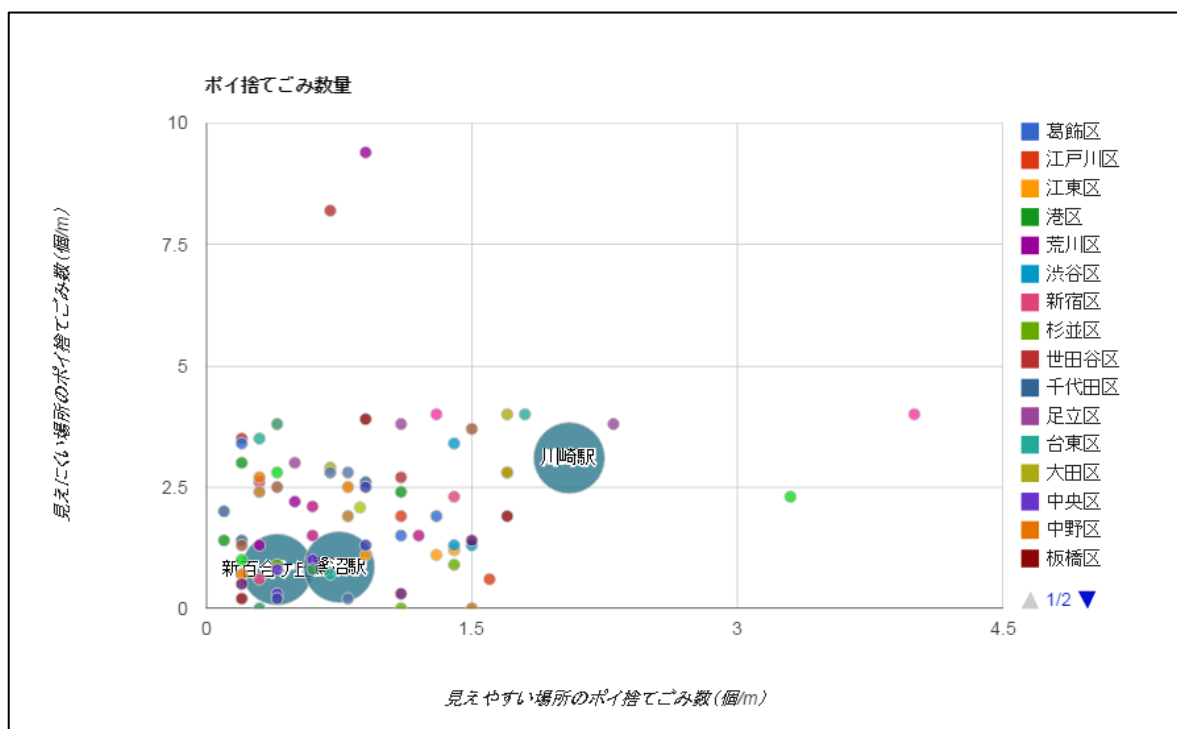


新百合ヶ丘駅周辺はキレイなのか？

小嶋氏により発表された新百合ヶ丘駅周辺のポイ捨てゴミの集計結果は「見えやすい場所」が 70 個、「見えにくい場所」が 169 個、合計で 239 個となりました。内訳をみると、「見えやすい場所」「見えにくい場所」両方で「その他」のゴミの割合が最も多い結果となりました。通常、「見えやすい場所」では「タバコ」の割合が大きいという傾向がありますが、「タバコ」は「その他」に次いで多いゴミとなっています。また、川崎駅周辺と新百合ヶ丘駅周辺の「見えやすい場所」における「タバコ」の量を比較すると、それぞれ 334 個と 29 個であり、10 倍以上の差があります。



また、横軸に「見えやすい場所」、縦軸に「見えにくい場所」とするバブルチャートを用いて、新百合ヶ丘駅周辺とピリカが独自に行なった東京 23 区主要駅前調査の結果とを比較しました。新百合ヶ丘駅周辺は東京 23 区内の主要駅と比較してもキレイであり、「全体的にゴミが少ない」という参加者の感覚を裏付ける結果になりました。





どうすれば路上ポイ捨てゴミを減らせるか？

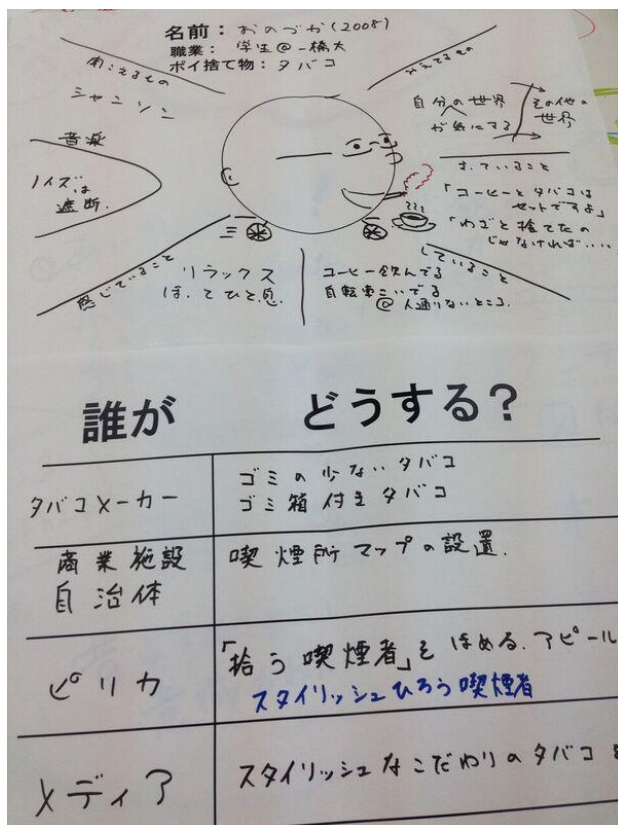
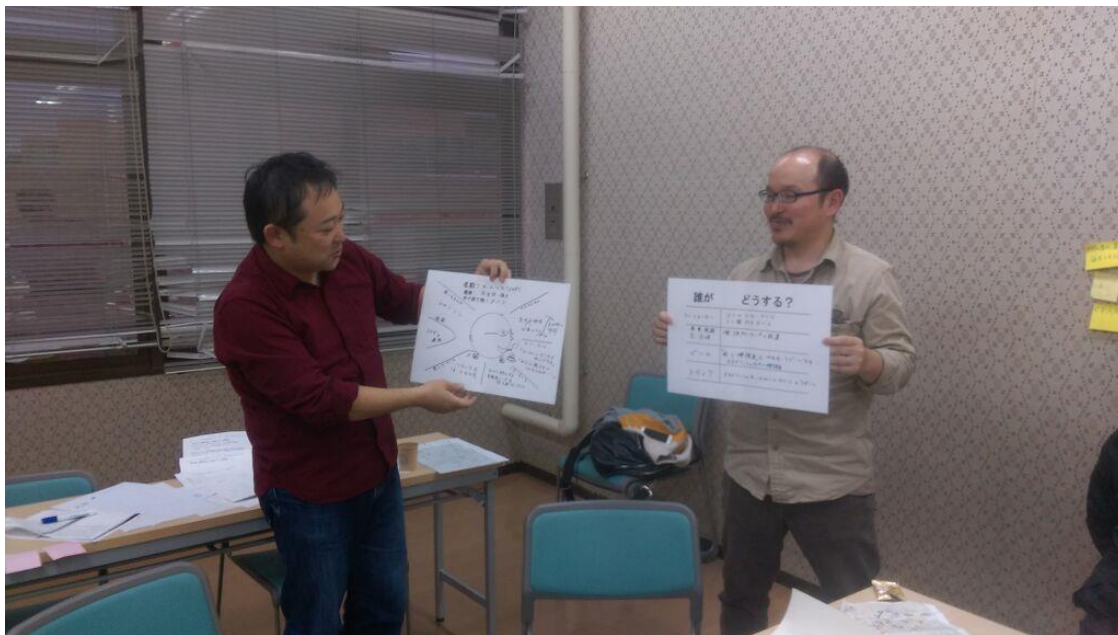
最後に、路上ポイ捨てゴミを減らすための解決策を考えるグループワークを 2 つのグループに分かれて実施しました。まず、ゴミの種類をくじ引きで選び、1 つグループはタバコ、もう 1 つのグループはガムのポイ捨てをしている人へのアプローチを考えることになりました。次いで、それぞれのポイ捨てをする人がどのような人かを「Empathy Map」という手法を用いて想像し、「Who Do?」の手法を用いて誰がどのようにすればポイ捨てを止めさせられるかを考えました。「Empathy Map」は、ポイ捨てをしている架空の人物像を作り上げるもので、ポイ捨てという問題をより具体的に考え解決するための洞察を得るための手法です。もう 1 つの「Who Do?」はアクションプランを考えるために役立つ手法であり、ポイ捨てを止めさせるためのアイデアを明確にする際に役立ちます。



2つのグループが発表した討議結果は次のようになります。

- タバコ

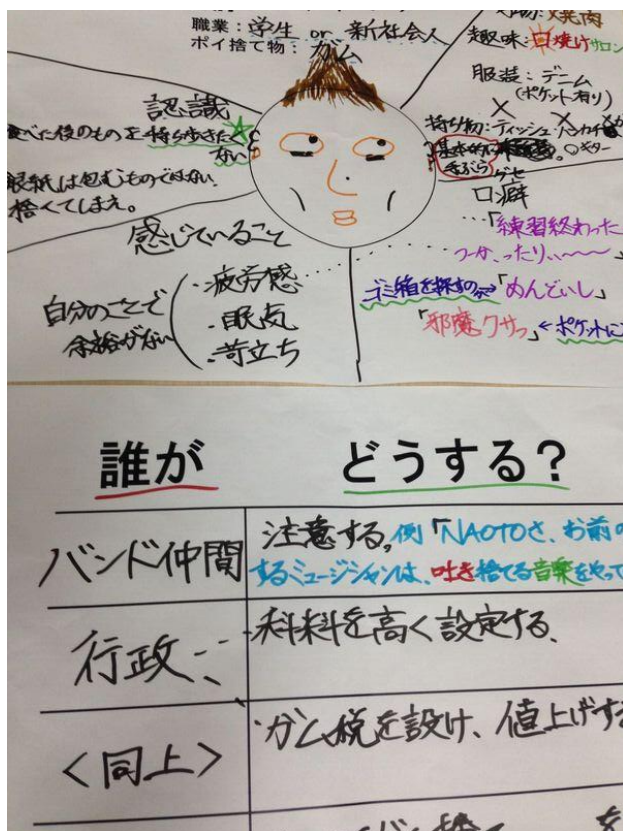
名前は「オノヅカくん 2008 年バージョン」。「21 歳の学生」で、見えているのは「自分が気にする世界」だけで、「外の世界は別の世界」。「コーヒーとタバコはセット」「わざと捨てたのでなければいい」と考えている。「普段からコーヒーを飲んでいる」「タバコは自転車や人通りがないところで吸っている」。聞こえているのは「シャンソン」という人物像。この人にポイ捨てを止めてもらうには、たばこメーカーが「ゴミの少ない／出ないたばこ」や「ゴミ箱付タバコ」を出す、吸える場所がわかるように商業施設や自治体が「喫煙所マップ」を提供する、ピリカのようなアプリが「ゴミを拾う喫煙者をほめる」などポジティブに評価する太陽政策が効果的、喫煙者がもっとカッコよくなるようにメディアは「スタイリッシュなこだわりのある吸い方をする人をアピールするべき」というアイデアが出ました。



● ガム

名前は「ナオトくん」。「ミュージシャンで年齢は 20 歳」「調子に乗っている感じ」「好物は焼肉」・「日焼けしていて」「服装はデニム」。「服にポケットは付いているけれど、ティッシュ、ハンカチ、荷物は持たない」。「練習かったるい」「ゴミ箱探すのが面倒」「そのまま捨てちゃえ」が口癖。「疲労感」「眠気」「苛立ち」を感じている。「食べた後にゴミを持ち歩きたくない」という人物像。ポイ捨てを止めさせるには、バンド仲間が尊敬するミュージシャンを引合いにして「ナオトさあ、お

まえの尊敬するミュージシャンは吐き捨てる音楽をやっても、ガムは吐き捨てねえぞ」と注意する。行政が「ガムを吐き捨てたときの罰金を高くする」「ガム税を設けて値上げする」。「携帯灰皿のような携帯ガム捨て容器をメーカーに作ってもらう」といったアイデアが出ました。



ゴミ拾い調査に参加して

閉会に際し、参加者全員がワークショップ全体を通しての感想を述べ、記念写真を撮影してワークショップは終了しました。



参加者の感想は次のようなものになります。

「本来は悪いことだと思っていることに対して、どう行動に移せるかということにちょっとヒントをもらった。」

「2回目の参加で前回との比較もできたとし、新しい人と顔見知りになれた。いい体験になった。」

「地元住民なので自分の街を振り返る機会になった。何よりもソフトな集まりだったので、こうでなければならないという形ではなく対話ができたとよかった。」

「有意義でいろいろなことを学べた。今回から参加したので個人的には前回のワークショップで調べた川崎駅前との状況との比較ができなかったのが残念。何回か参加すると意義がわかると思った。事前のイメージと違ってワークショップの中身はとてもおもしろかったので、一般の住民の方にもっと参加してもらえれば取組みが広がるのではないかな。」

「このワークショップは昨晚知ったばかりで、ピリカ社の取り組みのことも知人から紹介されたばかりだが、思い切って行動したことで世界が広がった。タイトルに対話が入っていることもあって多様性を受容する機会だったように思う。ゴミ拾いが強調されていたら、ゴミ拾いのプロフェッショナルの人達がアドバイスを持ち寄る形式と思ったかもしれない。自分の意見も受け入れてもらいながら、気持ちよく発言できたし、皆さんの意見に触れることができて心温まる体験だった。」

「新百合ヶ丘はキレイだなと思った。一方で、薄暗いところとか、一本大通りを裏に入って人通り

が少なくなるところにゴミが増えることに気付いた。暗いところを明るくするなど、何らかの環境を変えればゴミも減るというような印象を持った。意識を変えると同時に環境を変えていけば、キレイな街が実現するかもしれない。新百合ヶ丘は単純に飲み屋が少ないからキレイなだけなのかもしれないし、他の変数が影響しているかもしれないが、その辺りを分析できたら面白い。」

最後に、庄司准教授は「2回参加することで両極端を見たのが印象に残った。やっぱりタバコのゴミが一番多いこともわかった。前回から気になっているのが、植込みの隅など、人が捨てたくなる場所があること。今回もどこでもいいから捨てているのではなくて、明らかにわざと隠すように捨てていることがわかった。自動車の排気ガスによる大気汚染は意図せずみんなが少しずつ汚してしまうところがあるが、それとは違い路上ゴミは一部の人が意図的に捨てている。その行為を止めることができれば状況は大きく変わるのではないかと思った。これで2回分のデータができたので、次の3回目のデータとの比較が楽しみだ」と述べ、ワークショップを締めました。(執筆：富永裕子)